

## 216. 近江の古代寺院

### 研究の基礎資料Ⅳ

#### ⑤犬上郡多賀町榑崎東遺跡

榑崎東遺跡は琵琶湖東岸の犬上郡多賀町榑崎地先に所在する。遺跡の下流約400mの金屋橋付近には犬上川の扇状地を灌漑する一ノ井から四ノ井までの取水口が設けられ、このうち北岸の二ノ井による灌漑地域は天平勝宝3年(751)の聖田図に描かれる、著名な近江国水沼村に比定され、絵図の水沼池は現在の大門池と推定されている<sup>①</sup>。当地はこうした犬上川扇状地の田養水を制する位置にあることから、ふるくよりその重要性が認識され、榑崎古墳群などの古墳群が営まれたほか<sup>②</sup>、中世においては京極氏や榑崎氏のかかわるところとなった。

これまでに榑崎東遺跡の遺物として知られているのは軒丸瓦、平瓦、磚の3点で、いずれも発掘調査によってではなく採集によって得られたものである。西田弘氏や近藤滋氏のご教示によると、軒丸瓦とそれ以外の瓦類はそれぞれ別の機会に採集されたようで、遺跡発見の契機は昭和50年代の前半頃、地元在住の「田中さんという看護婦さん」が軒丸瓦を近藤氏のもとに持参されたことにあるらしい。したがって、遺跡の性格や正確な出土位置など、詳しいことは必ずしも明確でないが、遺物の採集地を示す当時のメモなどによると、遺跡の位置としては犬上川がまさに平地へ流れ出ようとするその南岸の、榑崎山の北側裾部付近と推定され

ている。こうした立地状況から、遺跡はこれまで「榑崎瓦窯」と称されることもあった<sup>③</sup>。

次に図示した瓦類について説明したいが、まず軒丸瓦(1)は瓦当全体の約1/2弱の破片で、瓦当文様は間弁を有す複弁8葉の蓮華文に復元される。圏線のめぐる中房には「1+8+8」の周環のない蓮子が認められ、蓮子は2周目のものが他のものにくらべてやや小さい。外区は有段の素文である。瓦当部と丸瓦部の接続は印籠継法だが、瓦当の裏面には「堤」が認められる。焼成は堅緻で、色調は灰褐色を呈す。平瓦(2)は広端側の破片と推測され、凸面には平行線文状の叩き締めが円弧を描いて施され、端縁付近にはさらに補足の叩き締めがおこなわれている。凹面には模骨痕と布目圧痕が認められ、布目圧痕には側縁に平行する布の縦じ合わせ痕が認められる。端面・側面および凹凸両面側の端縁・側縁はヘラズリする。焼成は堅緻で、色調は灰褐色を呈す。粘土板桶巻き作りと推測される。磚(3)は厚さ4.4cmを測り、少なくとも一方の面(下段)はヘラズリしている。焼成はややあまく、色調は灰色～灰黒色を呈す。

さて、以上で報告した瓦類は軒丸瓦の瓦当文様や平瓦などの技術的特徴から、おおむね白鳳時代に属すと推察されるが、このうち、ここでとくに注意したいのは、この軒丸瓦の瓦当部と丸瓦部の接続が明らかに印籠継法であるにもかかわらず、瓦当裏面に「堤」を有しているということである。この特徴ある軒丸瓦は滋賀県下においてはいまのところ榑崎東遺跡のほか、その周辺の彦根市正法寺瓦窯跡、竹ヶ鼻廃寺、屋中寺廃

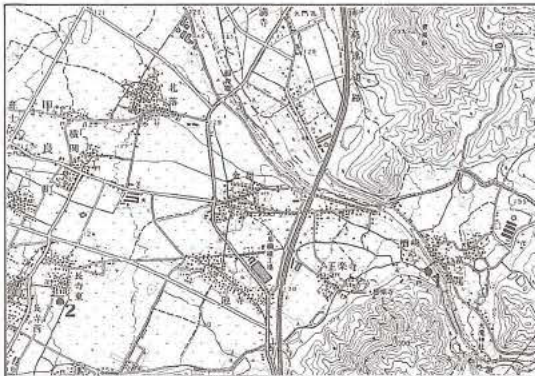


図1 榑崎東遺跡と関連遺跡の位置(1:50,000)  
1:榑崎東遺跡 2:長寺遺跡

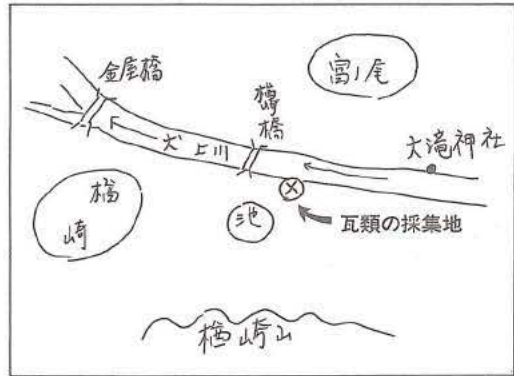


図2 瓦類の採集地を示す当時のメモ



寺、八坂東遺跡、愛知郡秦荘町軽野塔ノ塚廃寺、野々目廃寺など、湖東北部地域に集中して認められる<sup>④</sup>。これらをよく観察すると、この「堤」は製作の工程で必然的に形成されたものではなく、わざわざ瓦当裏面に粘土紐を貼り足して形成されており、いわゆる「一本造り技法」による軒丸瓦が、その技術上の特徴から円筒状の丸瓦部の一部を「堤」状に遺存しているのとは明らかに異なっている<sup>⑤</sup>。

こうした例は全国的にみてもきわめて少ないが、大和川原寺では瓦当裏面に多方向から工具をえぐりこませて中凹にし、「堤」状に形成する軒丸瓦が知られている。この軒丸瓦を検討された金子裕之氏は、これを南滋賀廃寺などの大津京関連の遺跡で見られる、いわゆる「一本造り技法」による「堤」<sup>⑥</sup>の「ルジメント（痕跡器官）」として捉えようとしている<sup>⑦</sup>。この説はさまざまな問題をふくんできわめて重要だが、湖東北部地域においては川原寺とは「堤」の形成法が異なることに加えて、瓦当文様も両遺跡のように「川原寺式」ばかりでなく、「山田寺式」や「軽野寺式」、さらに檜崎東遺跡のようにこうした分類のできないものも少なくない。また、伴う軒平瓦についても一般的な重弧文は少なく、瓦当面を「簾状」「指圧波状」にする特徴的なものが多い。今後は平瓦などのその他の瓦類も含めて、瓦生産の地域への展開を考慮しつつ、あらためて詳論したい。

(北村 圭弘)

註

- ① 弥永貞三「聚落と耕地（其の一）—近江国水沼村・霸流村—」（『日本歴史新書 奈良時代の貴族と農民』至文堂 1962）
- ② 用田政晴・山田友科子「群集墳の特質と展開—犬上

川左岸扇状地の場合—」（『多賀町文化財調査報告書第1集 多賀の文化財』多賀町教育委員会 1991）

- ③ 西田弘ほか（『近江の古代寺院』近江の古代寺院刊行会 P100 1989）
- ④ 福井県小柏窯跡出土の「軽野寺式」軒丸瓦にも瓦当裏面に同様の「堤」が認められる（的矢俊昭・奥田重喜『小柏窯跡試掘調査概報』織田町教育委員会 1991）。報告者はこれを鈴木久雄氏のいう軒丸瓦一本造りのB技法（鈴木久雄「一本造り軒丸瓦の再検討」『畿内と東国の瓦』京都国立博物館 1990）との関連で考えているが、むしろ瓦当文様と同様、湖東北部地域との関係で考えたほうがよさそうである。
- ⑤ 金子裕之「軒瓦製作技法に関する二、三の問題—川原寺の軒丸瓦を中心として—」（『文化財論叢』奈良国立文化財研究所 1983）
- ⑥ 林博通「いわゆる一本造りあぶみ瓦について」（『史想17号』京都教育大学考古学研究会 1975）
- ⑦ 小林行雄（『続古代の技術』塙書房 P336~P367 1964）

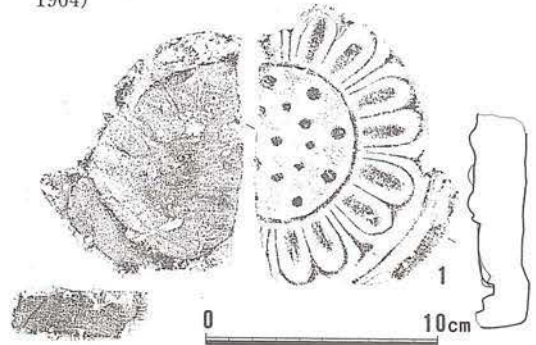


図3 檜崎東遺跡採集の軒丸瓦(S=1/2)

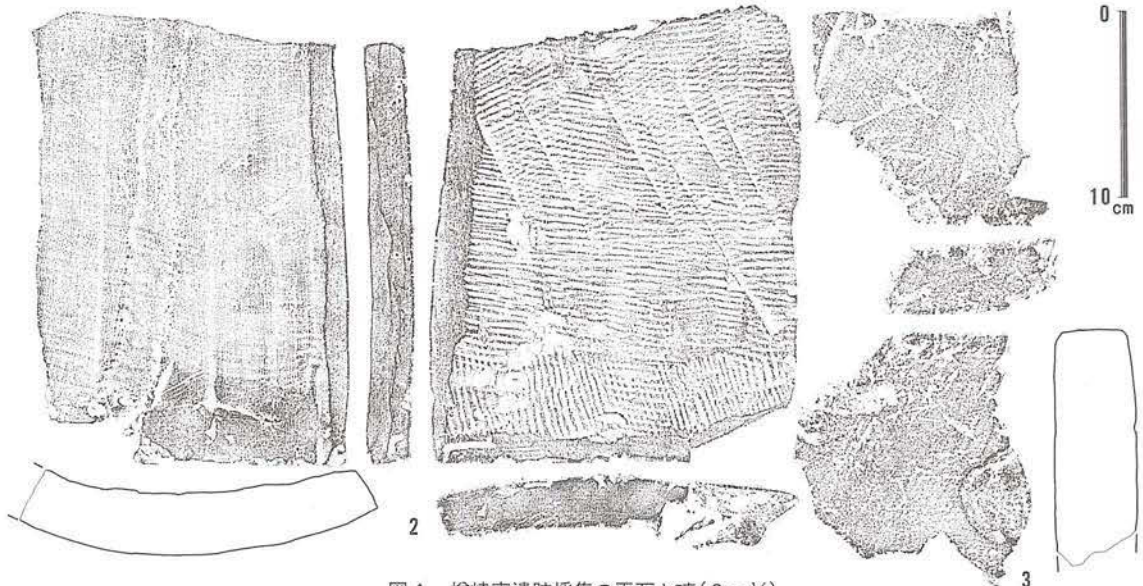


図4 檜崎東遺跡採集の平瓦と磚(S=1/4)



## 217. 「明治廿九年九月十二日 洪水最高標」石碑について

「…然るに雨猶止まず、十一日に至り午後十二時頃より大烈風吹き起り、東側の住家は見る見るうちに大破壊を生じ、午後六時頃より益々強烈風となり、且雨を加え、護村の男子も恐れをなして、円覚寺本堂・一丁土蔵等へ打ち寄りなどするうち、十二日午前一時過ぎ頃東風少し弱まりしを喜びいたるに、豈図らんや、北烈風になり、見る見る数戸を流し、数戸を崩壊し、最早これまでなりと、護村の男子も死を待つのみ。…」

明治29年(1896)は9月になってくずついた天気がつづき、7日から8日にかけては前線をともなう台風の影響で、彦根の降水量は両日の24時間で684mmに達した。また、3日から12日にかけての10日間では滋賀県の年間降水量の約半分強に匹敵する1,008mmの雨が降ったことになり、13日には瀬田唐橋の鳥居川量水標はプラス3.76mを記録している。

これが未曾有といわれる琵琶湖の大洪水で、冒頭に引用したのはその当時の、現彦根市柳川町における記録である。それによると11日には「湖水は益々増水して量水標は拾式尺四寸を示せり」と記されているので、柳川町付近における琵琶湖の水位は、少なくともT.P.88.13m付近までは上昇していたと推測される。これにもとづきその当時における琵琶湖水への水没(水込み)域を推定復元したのが図1である。実際は宇曾川や愛知川の堤防が決壊しているので、水害はさらに

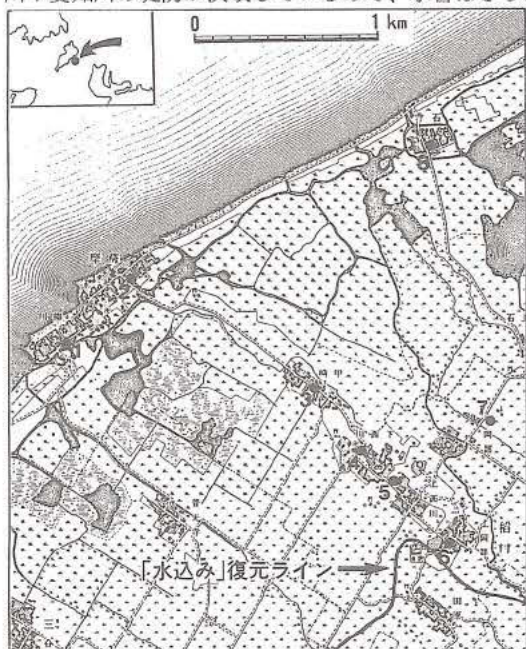


図1 「水込み」復元ラインと「洪水最高標」石碑の所在地

複雑であったと推測されるが、現上岡部町の長照寺や田原町の法泉寺が湖岸の村々の避難先となっているので、この復元に大過はないと思われる。

「明治廿九年九月十二日洪水最高標」石碑は、当該地域における、如上の大洪水を末永く記憶するために建てられたものである。これは単にひとつの石碑を指すのではなく、図1に示す所在地と同じ碑文の8本が確認できる。この石碑は花崗岩製の四角柱で、柳川町のものを除けば、ほとんどが原位置をとどめないが、現地表からの高さは上岡部のものが約102cmと最も低く、上西川のものが約157cmと最も高い。

次に、この石碑の分布を眺めてみると、その所在地は琵琶湖水に没した範囲内でも旧愛知郡稲村の範囲、すなわち、現在の彦根市稲枝北学区の範囲に限られていることがわかる。すなわち、この石碑は浸水しなかった田原を除けば、旧稲村のすべての集落に所在していることが知られるのである。このことを、先に述べた8本とも碑文が全く同じであるということとあわせて考慮すると、この石碑はそれぞれが単独で別々に建てられたのではなく、旧愛知郡稲村の各集落が申し合わせて建立した可能性がきわめて高いと推測される。

明治29年の大洪水を記憶するものとしては、大津市大萱の善念寺石垣の洪水線、東浅井郡湖北町尾上の相頓寺本堂の柱の洪水線、また、大津市下坂本の酒井神社境内の洪水碑、大津市瀬田の西光寺境内の洪水碑などをはじめとして数多く知られているが、今回紹介したように旧村を単位とするような規模で、同じ碑文の石碑を建立しているのは、他に例がないと思われる。

〔謝辞〕 石碑の所在地の確認にあたっては寺田藤吾氏のご協力を得た。深謝。(北村 圭弘)

### 参考・引用文献

寺田所平(『稲枝の歴史』P224~P232 1980)  
近畿地方建設局琵琶湖工事事務所・水資源開発公団琵琶湖開発事業建設部(『淡海よ永遠に 琵琶湖開発事業誌I』P29~P35 1993)

番号	町名	「洪水最高標」石碑の所在地
1	柳川	公民館前の地藏堂の道路向かい側
2	薩摩	無量寺北東側の道路向かい側の辻
3	甲崎	妙光寺の鐘楼北側の道路際
4	下西川	法園寺境内の庭
5	上西川	日吉神社の鳥居の横
6	上岡部	正徳寺前の地藏堂横
7	下岡部	公民館の玄関前
8	石寺	研修会館前の道路向かい側

表1 「洪水最高標」石碑の所在地

※番号は図1および写真1の番号に対応する





1. 柳川

2. 薩摩

3. 甲崎

4. 下西川



5. 上西川

6. 上岡部

7. 下岡部

8. 下石寺

旧愛知郡稲村の「明治廿九年九月十二日洪水最高標」石碑